

随想



海の貌

江藤和彦

海とかかりを持ってはや八年に
な。かかわりというより、私にとつて海
は生活の糧である。といって魚を獲った
り、操舵をしたり直接のつながりがある
わけではない。むしろここでは第三者的
傍観者の立場にあるといった方がよい
かも知れない。

それはともかく、私は毎日海を見て暮
らしている。面白いことに海は一日とし
て同じ表情を保っていないように私には
見える。
八十歳になる現役の老漁師にそのこと
を言ってみた。彼は一瞬戸惑いながら「
あんたはよう見とる。ばってんあんたが
知らん海がいっぱいあつとぞ」皺のすみ
ずみまで赤銅色の海の男である。
それでも私は彼の賛同を得てうれしか
った。老漁師は体験によってそれを熟知
している。一方、素人の私は、どちらか
という主観的あるいはある意識の下に
それをながめているのかも知れない。古
来、海をテーマにした詩歌文学は数えき
れまい。内面的な「存在」をもとめる対
象として、未知なる海ほど恰好なもの
はないからだ。しかし、どちらにせよ多
面的な海の素顔を両者共肯定したわけ
である。

多面的と言ったが、これほど直截な生
物もない。母なる海などと、すこし
も慣れ慣れしく甘えかかると、無数の
さ波のなから冷徹な海の眼が現われて
思わず射すくらまれる。しかし時には倫
理も損益もなげだして私をやさしく抱擁
してくれる。どちらも同じ海である。
天草下島西海岸、とりわけ私はこの海
が好きである。東支那海に面して海は屹
立する断崖に向かっている部分が多い。
水平線の向こうは何も見えない。従っ

て時化の日など打ち寄せる波のすさまじ
さは内海とは全く異なる。そんなとき断崖
や海中に突きでた岩の群が、まっ向うか
ら海に対決する姿勢は自然の摂理を越え
たものを感じさせる。この岩も海もどち
らも好きだ。あるとき、私はこの光景に
どれほど天の啓示のように勇気づけられ
たことか。
三年前、下島U市のある港でのこと
である。二月初旬強風が粉雪をなぐりつ
ける日であった。波戸場に大勢の人が立
っていた。もうずいぶん前からそうして
いるらしく、寒さにかじかんだ手足を動か
しながら海を見ていた。
遭難した漁船と救助に向かった舟を待
っているのだった。そのうち二重遭難
が気づかれるなかに別の救助船が港を
発進していった。何れも屈強な若者たち
である。大波に激しく上下しながら遠ざ
かっていく舟を見送りながら私は深い感
動にひたっていた。こんなに強いきずな
で結ばれた人達をかつて知らない。
私はこのとき激しい憤りの言葉を吐い
た。海に向かって、悪魔め、黒い牙をむ
いて、海はあとからあとからのしかかる
ように防波堤を襲った。それは視界いっ
ぱいを覆い、はじめて接した凶暴な海で
あった。

(詩人)

く。おしどりの鴨であろうか、仲よく
並んで水脈を長く長く曳きながら泳いで
いくのもいる。何処の世界にも変わり者
はいるのであろうか。一羽だけ反対の方
向に泳いでくる鴨もいる。私はかつての
日、本渡の水族館で見た魚の瞳を思い出
していた。魚の大群が潮流の流れに従っ
て泳いでいくのに一匹の魚は、澄んだ黒
い眼をしっかりと見開いて他の魚の群に
挑戦するかのように反対の方向に泳いで
いたことを……。かの一羽の鴨もあやう
な瞳をしていることであらうか。
夕暮れのかすかな光の中に、湖面に
つ立っては、折々白く腹を光らせながら
水の中にかづいて、小魚をさがしてい
る。冷たい夕風がさあっと吹くと湖畔の
穂芒が揺れ、鳴き渡る鴨の声も思ひなし
か心細げである。今宵は羽を寄せ合っ
て眠ることであらうか。夕空を飛んでいた
一群が、両翅をピンと張ってすべるよう
に着水する。今日は何処の空まで飛んで
行ったのだろう。

かと思うと、他の一群が帰って来て次々
に着水する。その眺めは実に壯観であ
った。やがて果てしない北の国へ飛び去
るための訓練であつたらう。また、親鴨が
子鴨が飛べるように訓練をほどこしてい
るのであろうと思つていとしく、いつま
でも眺めていた。ある朝、行つて見る
と、幾千羽の鴨の影は見え、柔らかな
さざ波に数羽の子鴨が寂しげに鳴いてい
るだけであつた。四、五日してこの子鴨
の姿さへも見えなくなつた。私は季節鳥
の感性に肅然としたものを感じた。「幾
千羽浮きまわし鴨の影なくて湖柔らかき水
を湛ふる」。また秋がめぐつて来て夕波
に漂ふ鴨の大群を私はしばしば眺めに
行くことだろう。

(歌誌「公孫」主宰万葉学会々員)

熊本の わらべうた

上村 てる緒

—あれはもう四年も前のことであらう
か。
ある日、突然に男性一人、女性二人の
訪問をうけた。男性と女性の一人は熊本

放送の御仁で、他の一人は、県の広報外
事課の人という。
話を聞くと、ラジオでながす八県庁か
らのお知らせVの時間に、毎回「熊本の
わらべ唄」を使いたいとのこと。その第
一回に「わらべ唄とは何か」を放送して
いただきたいと。
これは私が「五木の子守唄ノート」
「挽歌・五木の子守唄」の二著をあらわし
ているためと思われるが、これから採集
をはじめられるという御本人が、どの程
度ご存知なのだろうか—と、ちょっとし
たいはずら気もあって、
「あなたは、わらべ唄をどんなものと
思うか」
「あなたが知っているわらべ唄を、今
ここで歌ってごらん」などといった。
やがて私の「わらべ唄について」の録
音が終わわり、採集していた古い形の五木
の子守唄のダビングもすんで座をたたれ
る時、私はこれから県内のお年寄たちを
たずねて採集されるというその人に
「わらべ唄の採集は、自分の足でかせ
げ、そして自分の耳で聞き、心でとらえ
ろ」
「ただ単に歌を録音するだけではな
く、歌う人の心を読みとれ」
などといったように覚えている。
—そして本年三月「熊本のわらべうた
」という本が誕生した。収録歌詞数は一

九〇。「子守うた」にはじまって「お手
玉うた」「手まりうた」「せっせっせ」
「なわとびうた」「遊びうた」とつづい
ている。
これまでも、部分的には地区別民話集
や、他の郷土史などの一項目にとりあげら
れているものはあるが、県内全域を総体
的視野からとらえたものはなく、基礎的
資料としての価値も亦大きい。
ただ、譜面が一つもなく、継承者一覽
はあつても年齢の記載がなく、又歌い出
し索引や採集者の氏名がないことなどが
心のこりだ。
……とはいえ、足でかせいで採集した
歌の重みは、掲載の歌の一つ一つに光っ
ていてこれを読む者に、母のふところの
暖かさを想い感じさせる。
序文に沢田県知事がいう「ふるさとづ
くりの一環」の意義もまた充分にはたし
ているということが出来る。
願わくば、この「熊本のわらべうた」
にひきつづいて「熊本の民話」(勿論、
語り口のままの)「熊本の民謡」など、
転載や、孫引きでない、足でかせいだ記
録を出版していただきたいものである。
先日、熊本本まつり委員会から「今年
一年間に読んで最も感銘深かった本」す
なわち私のせいせんする一冊」に、この
「熊本のわらべうた」をえらぶのに、何
のためらいもなかった。(童話作家)

湖と鴨

綴 敏子

私は短歌にゆきずまるとよく画津湖を
眺めに出かける。静かな湖面のさざ波を
見つめていると何かしら心が安らぎ、し
っとりした叙情が湧くのを覚える。だか
ら私の歌には湖の歌が多い。「工場の汚
水素直に注がせて湖は哀しき色湛へるき
」「汚水注ぐ湖は澄まむと寂まれり夕
色の光かがよふ」。

朝の湖よりたそがれの湖が、春の湖よ
り秋の湖の色が私は好きである。先日湖
畔に行つて見ると、北国よりはやくも鴨
の群の第一陣がやつて来て夕波に、静か
に漂っていた。ふるさとの湖を忘れな
いで幾百キロ、幾千キロの大空をあの小さ
い体で飛翔してきたことであらうかと思
うと、ほのぼのとした愛情を覚えるので
ある。昔の画津湖の面影は見るべくもな
いが、秋になると心なしか湖水も澄んで
くる。茜雲をかすかに映し、静かに昏れ
てゆく湖面に「びよびよ」と寂しげに
鳴き交わしながらすすべるように漂ってい